金七紀男・住田育法・高橋都彦・富野幹雄共著『ブラジル研究入門』晃洋書房　2000年　272ページ。

本書は「発見」以来ブラジルが辿ってきた500年の軌跡をわかりやすく説明してくれるブラジル史の概説書である。時代を「植民地時代」「帝政時代」「共和制時代」「新共和制時代」（第二次世界大戦後）に分け，それぞれの時代の政治，経済，文学の特徴的な動きが記述されている。人種問題や所得分配などブラジルの社会構造をめぐる問題にも幅広く言及されている。さらに文学史を取り入れたことで入門書としての間口が広くなったことは本書の大きな貢献ではないかと思われる。ブラジルへの企業進出が盛んだったころに出版されたいくつかのブラジル関連書籍の内容が相当に古くなってしまっているだけに，このような総合的な入門書の登場が待たれていた。巻末の年表や参考文献リストも含めて情報量が豊富であり，入門者のみならず，ブラジルに関わっている実務者や研究者にとっても手元に置いておきたい一冊である。

（浜口伸明）

丸山浩明著『砂漠化と貧困の人間性――ブラジル奥地の文化生態――』古今書院　2000年　xxxi＋522ページ

本書は，砂漠化，それと密接に関わりつつ進行する貧困，飢餓のメカニズムを，ブラジルのノルデステ（北東部）について，自然科学だけではなく人文・社会科学をも動員して解明しようとする著者の長年にわたる実証研究の成果である。ノルデステの自然環境，経済活動，家族などの社会制度，繰り返す旱魃，過酷な自然への人間の適応と逃避（移住），芸術・文学に表われた旱魃と貧困，旱魃に対する行政の対応，砂漠化と貧困克服，持続的地域開発への展望などから構成される。その議論は，長期にわたるフィールド・サーベイに裏打ちされ説得的である。またノルデステに生きる人々とその社会に対する著者の深い洞察と愛情に溢れている。砂漠化と貧困は，ブラジルだけではなく，世界各地で深刻化しつつある。環境，開発問題に関心をよせ，その解決に心を砕く幅広い読者に薦めたい一書である。

（小池洋一）

小池洋一・堀坂浩太郎編『ラテンアメリカ新生産システム論――ポスト輸入代替工業化の挑戦――』（研究双書No.499）アジア経済研究所　1999年　339ページ

ラテンアメリカで新自由主義経済改革が広く実施されるようになって，すでに20年近い月日が経つ。改革の後戻りがもはや不可能であることは確かであるとしても，貧富の格差拡大といった弊害も明らかとなりつつあり，明るい展望が今ひとつ描けないのが現在の状況であろう。本書はこの20年来の変化を1930年代以来の生産システムの歴史的転換と捉え，転換の特徴を，システムを構成するアクターや制度等の分析によって明らかにし，新たな生産システム像を展望しようと試みたものである。アクターとし

て分析の俎上に乗せられるのは企業と労働で，大企業の所有関係や取引関係の変化，中小企業の集積による発展の可能性，農業の輸出産業としての再編，雇用関係の変化，知識創造の可能性が検討されている。制度等では金融システム，政府・財界関係，市民社会の新たな役割が考察されている。新システムの姿を包括的に捉えようとする点が特徴であり，その意欲は高く評価できる。現実の混沌に制約されて，各章の議論が新システム像に収斂するまでには至っていないが，その点は今後に期待したい。

本書は1998年にアジア経済研究所が実施した「ラテンアメリカの産業発展—新たなパラダイムの模索」研究会の成果である。

(星野妙子)

増田義朗編『ラテン・アメリカ史Ⅱ：南アメリカ』山川出版社　2000年　xi＋503ページ　付録129ページ

本書は山川出版社の新版世界各国史シリーズの第26巻にあたり，昨年出版された第25巻「メキシコ・中央アメリカ・カリブ海」とともに，ラテンアメリカシリーズをなしている。本書は南米の歴史を先スペイン期から遡り，横（時期別），縦（国別）に区切りながら，時代ごとの総括と国（グループ）別の歴史を縦横と編むように構成されている。時期区分ごとの総括により歴史的な流れがわかりやすく解説されている一方，13カ国の5世紀にもわたる歴史を一冊でカバーするため，各国レベルでの説明は大国ブラジルを除き多少詳細さに欠ける向きもある。しかし興味をもった読者には巻末の解説つきの国別文献リストがさらに詳しい文献へと導いてくれる。また本書ではラテンアメリカニストの中でもあまり馴染みのないガイアナ，スリナム，フランス領ギアナの3カ国もカバーされているのが興味深い。巻末には年表，各国の歴代元首一覧，南アメリカに関する用語解説などの付録があり，学生のみならず研究者にとっても便利な資料である。

(坂口安紀)

柳田利夫・文／義井豊・写真『ペルー日系人の20世紀——100人の人生，100人の肖像——』芙蓉書房出版　1999年　205ページ

1999年は，日本人がペルーに移住を開始してから100周年にあたる年である。本書のタイトルにあるように，奇しくも20世紀はペルー日系人の歴史全体でもあったわけである。本書は，日系移民史研究者である柳田利夫氏が100人のペルー日本人移民およびその子孫である日系ペルー人にインタビューし，同国に一時期居住していた写真家義井豊氏がその肖像写真を撮影して作成された異色のペルー日系移民の記録である。インタビューの相手には1895年生まれで在ペルー66年の移民1世の方から，9歳の日系5世の子供までさまざまな世代が含まれている。

柳田氏は，日系人1人当りの生活史を代表的なトピックや証言を織り交ぜながら，わずか1ページの中によくまとめている。戦前移民が経験した排日暴動，戦中の北米への送還，最近の日系出稼ぎ労働者の日本での体験など，そこには日本人移民・日系ペ

ルー人の生活の記憶が凝縮されている。その記憶が義井豊氏撮影のポートレートと重なり，ペルー日系社会の雰囲気を立体的に伝えるという本書の目的は達成されているように思える。

（宇佐見耕一）

増田義郎・柳田利夫著『ペルー　太平洋とアンデスの国』中央公論社　1999年　374ページ

本書も昨年のペルー日本人移民100周年を記念して出版された本である。内容は第1部が近・現代史を中心としたペルー史の概説，第2部がペルー日系人社会に関する記述である。総じて一般向けに，ペルーと同地の日系社会の歴史と現状を紹介することが目指されている。第1部は，近・現代史が中心とはいえ，インカ末期から現在のフジモリ政権に至るペルー史の概説となっており，日系移民の受け入れ国ペルーの歴史的背景を分かりやすく解説している。第2部は，第2次世界大戦開始以後の日系社会の歴史と，日系社会の状況に関して書かれており，ペルー日系社会の状況を手早く知ることができる。筆者は第1部が日本におけるラテンアメリカ研究の草分け的存在である増田義郎氏，第2部が『ペルー日系人の20世紀』の著者でもある日系移民史研究者の柳田利夫氏である。本書に関して欲を言えば，日系移民史に戦前の記述を入れて欲しかった点と，簡単でも文献目録を挿入して欲しかった点がある。

（宇佐見耕一）

小倉英敬著『封殺された対話――ペルー日本大使公邸占拠事件再考――』平凡社　2000年　371ページ

1996年12月にペルーの日本大使公邸をＭＲＴＡ（トゥパク・アマル革命運動)が襲撃し，ナショナルデーのレセプションに招待されていた客，大使館員等（当初600名余）を人質として，同所を3カ月にわたり占拠した。事件は，ペルー軍特殊部隊の武力突入，人質の救出(うち3人死亡)，ＭＲＴＡメンバー14名全員の銃殺あるいは「処刑」という終末を迎えた。

ペルー現代史の専門家であると同時に当時日本大使館の政務担当書記官であった著者は，人質の一人としてこの事件に立ち会うこととなった。その経験と専門家としての知見に基づいて，ＭＲＴＡはテロリストか，平和解決の道がなかったか，この事件の歴史的な意味はどのようなものであったか，などの諸論点が議論される。

ゲリラは人質を一人も殺していないのに，国家の側は突入した直後に法的手続き抜きで全員射殺したのは正当か，仮に相手がテロリストであったとしても，国家は相手との約束や仲介者の信義を反古にしてよいのか，といった素朴な疑問から目をそらさず，ラテンアメリカ先住民の被抑圧，貧困の歴史にこの事件を位置づけようとする著者のアプローチには，共感するところが多い。

巻末に資料編として，ドキュメントなどが付されている。

（米村明夫）